

「小牧長久手合戦図屏風」(犬山成瀬家所蔵)



多康重、水野忠重等、(徳川本隊)井伊直政、徳川家康、(予備隊)織田信雄』が長久手の地で激突したのが、世に言う長久手の合戦である。

岡崎進攻の羽柴方は、第一軍団・池田勝入恒興、之助父子六千。第二軍団・森武蔵守長可三千。第三軍団・堀秀政(監軍)二千。第四軍団・三好秀次(総大将)八千の総勢二万。対する徳川方は、追撃部隊の先遣隊四千五百と、家康本隊の前衛隊・井伊直政三千、徳川家康三千三百、織田信雄三千の計九千三百を加えた総勢一万三千八百である。

長久手の合戦もまた、一か所での戦いではない。日進岩崎城の戦い、白山林の戦い、松ヶ根の戦い、そして松ヶ根の決戦の計四箇所での戦いからなるが、最も激しい戦闘が行われたのが松ヶ根であり、家康自身の率いる軍勢が直截に戦闘に加わったのも、現在、資料館の建つ松ヶ根決戦地である。

天正十二年(一五八四年)四月九日未明、羽柴方先鋒の池田勝入・之助の隊による日進岩崎城攻めにより、その戦端は開かれる。

岩崎城は、当時織田信雄麾下にあった丹羽勘助氏次の居城。その岩崎城を守るのは、徳川方に加わって小牧に参陣した城主・氏次の弟の氏重(当時十六歳)と、姉婿の長久手城主加藤太郎右エ門忠景。史書によれば、池田隊が岩崎城付近を三河に向けて進軍する際、それを阻もうとする岩崎城の守兵の突然の銃撃に驚いた乗馬から池田勝入が落馬したこと、怒った勝入が、「土豪や小城などの抵抗には目をくれず一気に岡崎を衝け」との秀吉の忠告を忘れ、小癩な小城を血祭りにせんと城攻めにかかったとされている。

岩崎城方は、留守居役・丹羽氏重ならびに加藤太郎右エ門忠景と家臣、射夫、歩卒、奴僕、工商人入城者あわせて総勢二百三十八人。対する池田隊は約四千。敵の進軍を阻もうと決死の覚悟で果敢に戦った守備隊も、池田の大軍の前には多勢に無勢。ついには小牧への連絡役に城を抜け出た一人を除き、全員が討ち死にしたが、戦いは午前四時頃に始まり、六時頃には落城したと伝